

ICTを活用した国際交流の実践研究

- ICTで、つながる～共に学び育つ～そして拓げる-

池田明（大阪市立東高等学校）

概要： 国際的な学校間交流における ICT を活用した課題解決型協働学習により、主体的な情報活用能力・課題解決能力の育成を目指した実践の研究。日本の生徒が国際舞台で情報発信するために、現状では必要となる教師の積極的な体験場面設定について考察する。二つの国際交流イベント「ワールドユースミーティング国際プレゼンテーション大会 (WYM)」および、「アジア太平洋学生交流大会プレゼンテーション大会 (ASEP)」についての実践を通して、参加生徒の指導と大会運営に関するアレンジについて、その事例から課題と展望を示す。

キーワード： 情報活用能力・国際協働学習・多文化理解・アクティブラーニング・探究学習

1 国際交流実践の必要性

日本の教育現場における今日的課題の一つとして、国際的な視野を持ち、競争力・発信力を身につけた学生・生徒を育成するメソッドを確立する重要性が挙げられる。このような方向性を念頭に置いて、近年の学校現場では、国際交流を取り入れた実践例も多くみられるようになった。自身も高等学校における国際交流活動を含む実践を長年にわたって継続的に行ってきた。国際交流を含む実践の主な目的を、以下の三点と考え実践研究を続けてきた。

①主体的な情報活用能力の実践的・体験的習得
さまざまな交流活動を行ったり、イベントに参加、また生徒自身が運営したりすることで、単なるコンピュータ操作スキルやネットワークの知識習得だけでなく、情報の収集・加工・発信を総合的に行わせて、主体的な情報活用能力を身につけさせる。



写真1 協働作業でプレゼンテーションを作成

②高校生の視線での多文化理解

海外との国際交流活動の重要な目的のひとつは、多文化理解である。しかし、現状の実践では歴史的な民族文化や観光資源や環境問題などの国際問題に関するテーマで行われているものが多い。高校生が自身の普段の生活についての情報交換を行い、より身近な話題を通じて外国との文化の違いや共通点を考察させ、自分自身の実体験を情報として共有することで、交流相手との共感的な国際理解を目指す。

③交流に必要なコミュニケーション力の習得

インターネットを活用した交流活動を継続的に実施していくことで、ネットワークの活用スキルと、共通語としての英語の表現力を身につけさせる。

このような実践研究を通して、教員も単に交流諸活動の指導や引率にあたるだけでなく、国際交流コーディネータとしての役割を担わなければならない場面によく遭遇してきた。誰かがコーディネータの役割を担い、円滑な活動をサポートしなければならない。さまざまな交流活動において、時には学生や保護者などのボランティアスタッフがこれにあたったり、旅行社に依頼してさまざまな手配や添乗とともにサポートしてもらったりする方法もみられる。しかし、最終的なコーディネータの責任者は学校の事情や教育的意義をよく理解している教員が担うのが最も適していると考えられる。

2 ICT活用場面について

(1) 授業者やコーディネータによる活用

国際交流活動をとまなう実践においては、指導者によるICT活用は不可欠である。そのICTの主も重要な活用目的はコミュニケーションツールとしての利用である。後述のICT環境の変遷から見てもICT活用によるコミュニケーションが国際交流活動のコーディネートにおいて常に重要なポイントとなっており、ICTの進化にともなってより円滑でより密度の濃いかかわりを持った交流を実現する可能性が広がってきているといえる。これにともない、指導者のICT活用スキルも相応に求められることになる。

(2) 参加生徒による活用

近年、国際交流活動に参加する生徒はコンピュータネットワークを活用し、情報交換と交流活動をより活発に行うようになった。

ネットワークではメーリングリスト、掲示板など情報共有に必要な基本的な機能を使いこなして交流し、ICTのデバイスを活用してプレゼンテーションの作成、アンケート集計等のデータ処理、記録収集・編集のためのユーティリティソフトなど、各種アプリケーションソフトウェアを使いこなして情報発信と共有を行っている。その際には、タブレット、スマートフォン、デジタルカメラなどのハードウェアを使いこなす。時代と共に進化しつつ替わっていくさまざまなメディアを積極的に活用している。近年では、情報共有のために、クラウドやSNSも使いこなしている。そして、各種のネットワークへのアクセス方法や利用モラルについても体験的に学ぶ。

(3) ICT環境の変遷

1990年代ごろからの教育現場におけるネット利用の黎明期には、技術的にもまだまだ発達段階で、国際交流のネット利用に関しては準備段階から多大なコストをかけて実施していた。その効果は確実に認められ、ネット利用による

コミュニケーションは広がりを見せていく。

近年では、海外との情報共有にかかる時間もコストも劇的に減少したため、以前に比べて活発なやり取りがなされるようになった。参加者のICT活用力もこれにつれて向上してきている。換言すれば、このような国際交流プロジェクトにおいて、ICTを活用した情報共有は進化を遂げつつマストアイテムとして確立してきているといえる。

このように国内外との情報共有を行うことで、参加者も必然的に主体的な情報活用能力を伸長させている。すなわち、優れたプロジェクトデザインの国際交流活動に参加することは、情報教育の視座から見ても大変有意義である。

－国際交流におけるICT環境の変化－

〈2017 池田まとも〉

1990年代	ダイヤルアップ回線=実用化 ネット接続が希有で高額 **メール・ウェブページ
2000年代	ISDNの普及=一般化 ネットの教育利用が進む 専用回線で気軽に接続 **メール・TV会議
2010年代	ADSLから光回線へ=高速化 ポータブルデバイスが優勢 個人でも簡単に海外と接続 **SNS (Facebook, LINE など)

表 国際交流におけるICT環境の変化

(4) ICT活用における課題

ICT活用の際には、操作スキルの習得に関して、あるいは、マシンやネットワークの環境整備に関して、何らかの課題が必ず発生する。

操作スキル面で考えると、国際交流に携わるのであれば、指導者の立場でも参加者においても、コンピュータ操作やネットワーク設定などの基本的なスキルは、その時代に即応したものを身につける必要があると考えられる。ただし、情報教育の視座から見れば、ただコンピュータ

操作スキルを習得し上達させるということだけが目的なのではなく、そのスキルを活かして何を成すのか、何ができるようになるのかというビジョンが必要であるといえる。

また、環境整備という面では、まずコストの問題がある。特に導入コストは何とか計上して執行しても、ランニングコストや更新にかかる諸費用の捻出が難しいケースがよく見られる。

また、国際交流でのICT活用には、交流する双方のデジタルデバイドへの配慮も必要である。

3 国際交流活動の実践例

(1) ワールドユースミーティング(WYM)

ワールドユースミーティングとは、1998年より、毎年日本で夏休み期間に実施されている学生・生徒・児童向けの国際交流会議である。この趣旨は、WYM実行委員会によって、以下のように述べられている。

『福祉、環境、国際などをキーワードとする教育はK-12においては「総合的な学習」分野でとりくまれ、高等教育においても欠かすことの出来ない分野である。しかしながら、座学としては成立しているものの、具体的な交流場面をイメージした取り組みの成功例は数少なく、ましてインターネットの教育利用と連動した企画は数少ない。この取り組みは1校対1校の点と点の交流ではなく、海外大学、高校、国内大学、高校と連動したネットワークによる試みである。文部科学省ならびに、アジア太平洋国際会議(APEC)の後援を受け、高大連携の先進的な企画でもある。インターネットの教育利用は世界同時進行であり、APECなどでは各国の担当者がデジタルデバイド、コミュニケーションデバイドの克服に連携をとりながら進めている。このような状況を鑑み、日本において、各国の情報教育担当者や連携し、インターネット活用を中心とした国際交流イベントを開催する。』

(WYM 趣意書より抜粋)

ワールドユースミーティングの取り組みは、以下のような流れで進行する。

4月 担当教員スタッフ打ち合わせ

6月 代表生徒によるプレミーティング

8月 ワールドユースミーティング本番
国際プレゼンテーション大会

および、国内外生徒の各種交流

ただし、これらは、あくまでも何らかのフェイストウフェイスの取り組みが行われるスケジュールである。ワールドユースミーティングの実践において、最も重要なポイントは、継続的にネットワークによる交流が頻繁に行われている点である。近年ではSNSの活用も盛んになってきた。事務的な連絡や打ち合わせにはじまり、教員間・生徒間の意見交換や日程などの調整、各種調査やデータのやりとりまで事前事後に活発にやりとりがある。

この種の交流活動は一過性のイベントだけに重点が置かれたモノになりがちである。しかし、このワールドユースミーティングの取り組みにおいては、本番はあくまで通過点であると参加者が一様に認識できている。したがって、事前・事後の交流も継続的に実施できているのである。

(2) アジア学生交流プログラム(ASEP)

ASEP(Asian Student Exchange Program)は、2000年より毎年12月に台湾で開催されている国際交流活動イベントで、高雄市政府教育局の全面協力のもとで開催されている。台湾側ホスト校と海外からの参加校とで英語によるプレゼンテーション大会を実施することをスケジュールの中心にしている。また、約一週間の会期中は、海外から参加の学生・生徒をホスト校の手配によるホームステイで受け入れ、学校訪問も実施するなど、生活・文化の体験もできる。WYMとの姉妹企画で、日本では夏休み、台湾では冬休みの期間に毎年開催されている。ICT活用、英語によるプレゼンテーションを通して、アジアの英語教育活動と、インターネット時代の国際交流のあり方を追求している。

自身ではこの活動に、2004年から参加し、近年は日本側の事務局的な役割を担当してきた。スケジュールは、例年概ね以下の通りである。

8月末ごろ～ 大会と渡航日程の調整確認

Ex.) ASEPは冬季休業期間の開催となる
終業式や補講など各校の事情がある
台湾側に対応可能な日程を伝える

9月 大会日程の決定・日本からの参加調査

Ex.) ネットで参加見込みを確認
相手校がある学校は個別に連絡調整

10月 旅行手配・プロジェクトチームの決定

Ex.) ホストの組み合わせを決定する
各校で旅行手配を行う
参加者リストを各校から集める
現地日程など全体の確認事項もある
日本の参加者リストを取りまとめる
学校名・航空便のデータなども収集
取りまとめた情報は、日台で共有

12月中旬まで 手配と運営日程の最終確認

Ex.) 出迎えの手配等を確認
現地での移手段について確認
大会当日以外の動きは各校確認
参加者の増減や別日程参加者の確認
現地での連絡手段の情報共有
ASEP大会当日の食事など詳細確認

12月下旬～ 事後処理と継続的な交流推進



写真2 ASEP2017 プレスカンファレンス

ASEPに参加する日本チームの特徴は、日本各地からのさまざまな参加者で構成されているという点である。通常国際交流活動では多くの

場合、日本チーム全体が1つの団体として行動し、費用や日程など、厳密な共通の事前プランに基づき実施しているのが一般的である。

対して、ASEPでは参加者の行動については、プレゼンテーション大会の日程など基本的なイベントを除いては、各自の責任でもって決定し遂行する。換言すれば、参加者が必ずしなければならない事として規定されているイベントの数が圧倒的に少ないといえる。この点から鑑みて、コーディネータの必要性が高いといえる。

この台湾高雄におけるASEPにかかわった関係者は、さまざまな国際交流活動の中でも最も有意義な活動の1つであると感じられるようである。参加する教員にとっても学生・生徒たちにとっても、学びや気付きの多いこのASEPという取り組み特徴は、柔軟性と継続性にあるのではないかと推察される。この二点は、単に大会当日の、あるいは、台湾高雄での滞在期間だけの種々のイベントや活動だけでなく、事前・事後の取り組みや手配・事務処理といった部分をとおしてより強く実感できる。

実務ではスペシャリスト的なコーディネータ教員らに頼るところも大きく、マンパワーの継続的な確保と、後進の育成が課題である。

<参考>

「教育の情報化で生まれる“魅せる先生”」
影戸誠 著インプレスコミュニケーションズ
「企画実践型カリキュラムをつくる」

田中博之 編著 明治図書

「コンピュータ教育のバグ」

池田明 著 日本文教出版

“World Youth Meeting 2018”

<http://www.japanet.gr.jp/w2018/>

“Asian Students Exchange Program 2017”

<http://www.kageto.jp/asep/2017/>

この研究は、パナソニック教育財団「平成30年度（第44回）実践研究助成」を受けています。